別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　朴　正義

本論文「「悠久の歴史をもつ単一民族国家」批判――『三国遺事』檀君による一つの民族の擬制――」は、朝鮮民族の祖とされる檀君について、それがどのように作りだされたかを考察したものである。檀君は、現在の韓国において、「悠久の歴史をもつ単一民族国家」という民族的アイデンティティーの核心をになうものである。紀元前 2333 年に檀君王倹が古朝鮮を建国したことを民族の歴史の始発として位置づけ、「世界史においても稀に見る単一民族国家」という国民的コンセンサスを確立している。本論文は、そうした檀君の問題に果敢に挑み、それが中世における「古代」の構築のなかで作りだされたものにはじまり、朝鮮王朝時代をつうじて民族の祖として確立されたことをあらわしだした。朝鮮時代に檀君以来自立した国家の歴史と伝統をもつという歴史像を形成したことをあきらかにし、日本の植民地支配のもとでは檀君は民族独立の象徴となったこと、それが現在にいたることを論じたのである。

本論文は、「はじめに」、第一章「『三国遺事』の世界像」、第二章「中世の檀君」、第三章「檀君の再創造」、第四章「歴史教科書と『三国遺事』檀君」、「結論」から構成される。「はじめに」では、檀君朝鮮の建国を起点とする単一民族国家という、現在の韓国の標準的古代史理解を紹介し、その根拠となっているのが『三国遺事』の檀君神話であることを確認する。

第一章は、その『三国遺事』の基本的なテキスト理解からはじめ、それが檀君を祖とする一つの民族ということを語るものではないことをあきらかにした。『三国遺事』は、天帝釈桓因の命によって天から降った桓雄の子としての檀君を、中国の堯とならんであったものとして示し、朝鮮半島が中国によってひらかれ教化されたのではないことを確証する点に本質があることを論じる。

第二章では、中世におけるテキストとして、『三国史記』、『帝王韻紀』と、『三国遺事』とをあわせ見ながら、それぞれのテキストに即して分析し、それぞれの「古代」が作られていることを見定める。『三国史記』には、高句麗・百済・新羅三国の別々の祖が示され、しかも檀君とはつながらない。『帝王韻紀』は三国の祖を語らず、檀君だけを天帝と結びつけ、朝鮮半島全体の祖とするのである。それらは、元の侵冦という危機の時代に、みずからの歴史的根拠を確信するいとなみであったととらえられる。

そして、第三章では、朝鮮王朝において、朝鮮半島開国の祖としての檀君の歴史的定着は、檀君朝鮮から箕氏朝鮮へと展開する古代史像を作りあげてはたされたことを見届けるのである。一貫して自立した民族の歴史の始祖たる檀君はここに定位されると見るもので

ある。それは『三国遺事』をふまえるかたちをとっているが、他のテキストと融合しつつ転換する再創造にほかならなかったことをあきらかにした。その檀君が、植民地時代にあっては民族的抵抗のよりどころとなり、それゆえ、現在の歴史認識を強固に規制するものとなっていることをたしかめるのが、第四章である。

第四章では、高校から小学校にいたる教科書の歴史記述を具体的に見てゆくという作業をつうじて、檀君建国以来の一つの民族としての歴史を国民教育の場で刷り込んでいることを明らかにする。「結論」は、こうしたふりかえりにたって、現在の「古代」像を見直すべきことを提起する。

本論文の意義は、現在の韓国において支配的な古代認識の核心をなす檀君について、根本的な見直しを試みたことにある。民族の祖として位置づけられてきたことを根幹から問いなおすものであり、常識と通念に対する果敢な挑戦といってよい。諸テキストを融合させてきた従来の方法に対して、それぞれのテキストの論理に即して見極めるというテキスト理解の方法とともに、民族の祖としての檀君が作りあげられた歴史の問題を明確に開示したことは、今後檀君の見直しをうながす一石となるであろう。そうした先駆性をもつものとして、本論文の意義は高く評価される。

ただ、その論述が素描的で、十分説得的なテキスト理解をともなわないところがあるという指摘があった。また、資料の訓読についての誤りも指摘された。しかし、それらは本論文の価値を損なうものではないというのが、審査委員の一致した評価であった。

したがって、審査委員会は全員一致して、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。